

☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆

第7回数理社会学会大会プログラム

日時 1989年 3月11日(土) 9:00-18:00
12日(日) 9:00-12:00
会場 コミュニティ嵯峨野(京都市右京区嵯峨天竜寺広道3-4)
TEL. 075-871-9711
大会委員長 高沢 淳夫(京都大学)

☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆ ★ ☆☆

大会参加費は、一般会員が1500円、学生・院生会員が1000円です。食事代、懇親会費、宿泊費は以下の通りです。

宿泊費 約5000円(変動あり)
食事代 朝 700円、昼 1000円、夕(金曜日) 1000円
懇親会(土曜日夜) 5000円

なお、不明の点につきましては、下記まで、電話またはファクシミリでお問い合わせ下さい。

大会の運営: 大会委員長・高沢淳夫(京都大学教養部)
TEL. 075-753-6610 研究室ダイヤル / 0775-73-6797 自宅
プログラム: 研究理事・海野道郎(東北大学文学部行動科学研究室)
TEL. 022-222-1800 EX.2671, FAX. 022-221-5207

【3月10日】 (宿泊) 自由懇談

【3月11日】

7:00-8:30 朝食
8:30 開場・受け付け開始
8:50 開会 大会委員長 高沢淳夫(京都大学)

I. 9:00-10:30 研究報告(I)、オープンセッション

司会 塚原修一(国立教育研究所)
中村 隆(統計数理研究所)
高坂健次(関西学院大学)
1. 漁業における乱獲の数理モデル
-再生産を伴う資源と社会的ジレンマ-
○吹野 卓(関西学院大学)
2. 二者択一の社会的決定理論
○富山慶典(常磐大学)
~現状と課題~
新井 潔(近畿大学)

II. 10:30-11:45 会長講演「数理社会学における『内容』と『形式』」
会長 平松 闊(九州工業大学)

III. 11:45-12:30 総会
12:30-13:30 昼食

IV. 13:30-15:00 特別解説「SIMSOC (simulated society)」
広瀬幸雄(名古屋大学)

V. 15:00-18:00 シンポジウム「数理社会学と計量社会学:教育と訓練はどうあるべきか」
司会 高沢 淳夫(京都大学)
長谷川計二(東北大学)

報告者 白倉幸男(北海道大学)
小林淳一(福岡大学)
高坂健次(関西学院大学)
坂元慶行(統計数理研究所)

18:00-20:00 懇親会

【3月12日】

8:45 開場・受け付け開始

VI. 9:00-12:00 研究報告(II)、オープンセッション

司会 和田修一(早稲田大学)
三隅一人(九州大学)

1. 秩序問題の数理モデル 盛山和夫(東京大学)
2. 階層研究と「階級」 原 純輔(横浜国立大学)
3. これからの社会階層研究 今田高俊(東京工業大学)

12:00 閉会 大会委員長 高沢淳夫(京都大学)

## 自由報告の受け付けについて

自由報告をご希望の方は、次の要領でお申し込み下さい。

\* 発表内容は必ずしも研究の「成果」である必要はありません。ちょっとしたアイデアやコメントなども、研究者の交流や研究の活性化に寄与するものとして歓迎します。また、研究の途中経過でも結構です。学会大会で会員諸氏のコメントを受け、それをふまえて改訂したうえで、学会誌『理論と方法』に投稿することを期待します。

\*\* 他の学会に発表したものでもかまいません。発表時間や討論時間は融通がききますし、相手も同じではありませんから、他の学会とは違った雰囲気の中で、じっくりと議論してもらえることが期待できます。

### 1. 送付される申し込み用紙に次の点を明記のうえ、封書またはFAXで申し込み下さい。

イ) 口頭報告か、その他の方法か

ロ) 希望時間： 希望が出そろった段階で調整しますので、とりあえずは、希望発表時間および希望討論時間を、他の発表者や全体については配慮せず、内容に則して記して下さい。どうか、既存の学会の慣習を無視して、発表内容に即した希望時間を書いて下さい。

ハ) テーマ： なるべく内容が分かるように具体的に

ニ) 種別： 以下の2点につき、それぞれ1つを選んで下さい。

① 数理解析、計量分析、その他

② 理論、方法、実証

ホ) 概要：簡潔に、しかも内容が分かるように具体的に

### 2. 申し込み先

〒804 北九州市戸畑区仙水町1-1 九州工業大学 TEL 093-871-1931  
井上 寛 FAX 093-871-3723

### 3. 報告要旨(要旨集原稿)について

自由報告に申し込みをなさった方は、下記の要領にて、発表要旨をお送り下さい。

イ) 締め切り

報告要旨の提出をもって、正式の発表申し込みとみなしています。期日に遅れた場合には、発表できなくなりますので、厳守願います。

ロ) 形式

1) 原則として、機関誌『理論と方法』の執筆要領を準用します。

2) 長さは、2ページ以内(図表などを含む)とします。なるべく余白の無いよう

スペースを有効に使用して下さい。

3) 『理論と方法』とは違って、タイトルや発表者名なども、ワープロで書いて下さい。大会本部でそのまま縮小印刷します。

ハ) 内容

研究の種類によって一律には考えられないとは思いますが、適当に分節して、簡潔にまとめて下さい。

(例) 0. はじめに(報告の目的と先行研究の検討)

1. モデルの構築

2. モデルの分析(インプリケーションの検討)

3. モデルの適用

4. 結論(今後の課題)

## 第8回学会大会について

大会委員長 岡太彬訓

### 1. 大会の運営について

数理社会学会第8回大会は、去る10月23日(月)、東京都豊島区の立教大学セントポールズ会館で開催されました。10月21日から10月22日にかけて、日本社会学会大会が早稲田大学で開催されていたこともあり、大変多くの会員の方々にご参加頂くことができました。大会参加者の内訳は、会員57名(一般会員45名、学生院生会員12名)、非会員15名(7名は学生院生)、合計72名でした。今大会では初めての試みである会長、理事、監事の選挙が行われました。

大会参加者(50音順)：石原公英、稲月正、稲葉昭英、井上寛、今田高俊、岩本健良、海野道郎、浦田広朗、江川直子、江口貴康、大沢真幸、岡太彬訓、奥喜正、奥田栄、加田修、片岡栄美、片瀬一男、金子雅彦、木村邦博、木村隆之、久慈利武、国崎敬一、小林淳一、古谷野巨、佐藤広志、佐藤裕、佐藤嘉倫、坂元慶行、志田基与師、下村圭子、白倉幸男、鈴木透、盛山和夫、高沢淳夫、高瀬武典、高橋和子、千野直仁、趙京、筒井英人、都築一治、徳安彰、富山慶典、友枝敏雄、直井優、中井美樹、中田知生、中村隆、永田えり子、西阪仰、西脇裕之、野呂芳明、橋爪大三郎、長谷川計二、ハーム・スミス、原純輔、平田暢、平松闊、広瀬幸雄、深松龍文、吹野卓、藤村正司、堀川三郎、前田穰、宮台真司、宮野勝、元浜涼一郎、山岸俊男、山口弘光、与謝野有紀、余地寛、渡辺裕子、和田修一

### 2. 大会の研究報告などについて

本大会では、ラウンドテーブルセミナー4、招待講演1(Herman W. Smith氏:Associate Professor of Sociology at The University of Missouri-St. Louis)

、ポスターセッション3が行われました。発表内容については、報告要旨集をご覧ください。報告要旨集は残部が多少ありますので、必要な方は、大会実行委員会（立教大学社会学部 岡太）までご連絡頂ければ、お送りいたします。ラウンドテーブルセミナーの内容については、コーディネーターの報告をご覧ください。

今大会はご参加頂いた方が大変多く、定員80名の会場がほぼ満席となり、活気に満ちた大会になりました。ラウンドテーブルセミナー、招待講演、ポスターセッションのいずれも活発で密度の高い議論が展開されました。

最後になりましたが、ラウンドテーブルセミナーのコーディネーターの方々、招待講演者のハーム スミス氏、ポスターセッションのご発表者、そして研究発表での討論にご参加頂いた方々、ご多忙中にもかかわらずご参加頂いた参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、今大会の企画、運営に絶大なお力添えを頂いた理事の方々に深く感謝する次第です。

#### ラウンドテーブルセミナー「変化をとらえる」

コーディネーター 原 純輔（横浜国立大学）

このセミナーを企画したコーディネーターとしての意図は、実証研究の中でさまざまな「変化」をとらえ、説明しようとするとき、いわゆるクロスセクショナルな分析だけではなく、（データ蒐集上、分析方法上の困難は多いとしても）他の方法にも果敢に挑戦しよう、参加者の意欲をかきたてることにあった。そこで、教科書等で名前だけは知られていながら、実際の経験者は案外少ないと思われる、いくつかの方法について紹介してもらおうと考えたのである。

当日は、時間配分を考慮して、予定していた話題提供者のうちから、中村 隆（継続調査を用いたコホート分析）、直井道子（パネル調査）、都築一治（職業経歴データの分析）の3氏に話していただき、一問一答の形で議論を進めた。議論の内容は、司会者個人の関心も反映して、データ分析というよりはデータ蒐集、データの質という問題に偏ってしまったきらいがあり、参加者からも不満が出た。また、最初の企画の性格上、1つのテーマをめぐって議論が沸騰するということはなかったけれども、経験者の迫力ある話題に、参加者の側もそれなりの感銘を受けたのではないだろうか。

当日も指摘した点であるが、今回のラウンドテーブルセミナーは、従来のそれとは性格を異にしている。これまでは、昼食をとりながら気軽に（好い加減というわけではないが）ちょっと息を抜いて話しましょう、という雰囲気であった。私自身は、今回も、そういうつもりで企画を始めたのである。今回のように、学会大会のいわばメインディッシュとして位置づけるのも、決して悪くはないけれども、従来のやりかたにも捨て難い味があるように思う。

なお、コーディネーター、話題提供者以外の参加者は以下のとおりである（記載漏れがありましたら御容赦下さい）。江川直子、江口貴康、深松龍文、長谷川計二、堀川三

郎、稲葉昭英、金子雅彦、片岡栄美、片瀬一男、木村隆之、中田知生、中井美樹、野呂芳明、坂元慶行、佐藤広志、高瀬武典、友枝敏雄、趙京、渡辺裕子、与謝野有紀。

#### ラウンドテーブルセミナー「非対称をとらえる」

コーディネーター 岡太彬訓（立教大学）

このラウンドテーブルセミナーでは、さまざまな非対称な現象を考察することから出発し、これらの現象のモデルを構成するときの問題点や考え方について討論した。特に非対称性をどのように定義するかということが今後の研究の発展にとって重要であることが指摘された。

参加者（50音順）：稲月正、海野道郎、岡太彬訓、鈴木透、盛山和夫、高沢淳夫、高橋和子、千野直仁、ハーム スミス、平松闊、吹野卓、山口弘光、和田修一

8人の報告者（千野直仁、鈴木透、和田修一の3氏）が、非対称データとそのモデル、我国47都道府県間における通婚における非対称性、歴史的な流れにおける因果性すなわち原因と結果という観点からの非対称性に関する発表を行った。モデルに関してはプロセスモデルやダイナミックモデルの重要性、通婚に関しては同一都道府県内の通婚の扱い方、歴史的な流れにおける因果性においては個人と社会制度の関係における非対称性などが討論の中心であった。また、非対称性を扱う場合に対称性を主とし非対称性を従とする考え方を改め、両者を対等に扱うべきであることが話題になった。これは従来の非対称性の研究ではあまり問題にされていなかった点であり、今後の研究に大きな影響をあたえるものと期待される。

#### ラウンドテーブル・セミナー「社会理論のフロント」

コーディネーター 今田高俊（東京工業大学）

本セミナーは、社会理論の最前線は何処にあるかを、自由に提出しあって活発な議論を展開することを趣旨として開かれた。社会理論の構築にとって、ブレイクスルーするポイントは何か。たんに社会学にかぎらず、社会科学、自然科学、人文科学を含んだトータルな学問状況のなかで、理論のベクトルがどのような方向に向いているのか。などの議論を通じて、社会理論のフロンティア開拓の模索を意図した。

参加者は、前田穰（奈良大）・平田暢（九州大）・小林淳一（福岡大）・宮野勝（東海大）・余地寛（東京工大）・奥田栄（日立製作所・基礎研）・今田高俊（東京工大）・大澤真幸（東京大）・西脇裕之（慶応大）・白倉幸男（北海道大）・山岸俊男（北海道大）・石原公英（横浜国大）・徳安彰（法政大）の諸氏である（参加セッションの調べによる）。

本セッションでは、まずコーディネーターから、簡単に諸科学の現状と社会理論の開拓すべきフロントについての問題提起がなされた。その内容は、現在、社会学だけでな

く、哲学、人文科学、自然科学、社会科学の領域において、新たな潮流が一つに収斂しつつあること。諸科学の新たな動きは、これまで構造と機能を中心として運営されてきたモダン文明に収斂しない意味現象（非構造的で脱機能的な領域）を考察の対象にしてきており、意味をキーワードとした社会理論の構築が不可欠であること。

その後議論に入り、どうして意味の問題がフロンティアになるのかについて、その定義やシンボリズムとの関連、意味の社会論理学の可能性、認知科学における意味と理解の問題との関連、ファジー理論との関係など、様々な議論が続きリゾミックな展開になった。議論の一つのリアリティが見えたのは、山岸氏が社会進化論とマイクロ・マクロリンクとの関連で、Rational Choice Theoryの議論を持ち出した頃からである。この理論は、個人の合理的選択を前提とすると、マクロ的には悪循環、意図せざる結果、ジレンマ等に陥ることを数理的に明らかにしようとしており、近代の合理性のもつ本質的矛盾を突こうとしていること。また、これまで社会学の主要対象から締め出されてきた感情の問題は、社会学における意味処理の破綻を如実にあらわしていること。合理的選択だと反応のエマージェンシーに対処しきれなくなること。等々、従来の社会（学）理論で見落されてきた問題が議論され、最終的には従来の社会学概説書を根底から書き換えるべきだとする小林氏の発言に象徴されるように、社会学的な「知の組み替え」を真剣に考えてみる必要があるとの共通理解に達した。

これからの社会理論構築にとって、近代の社会学が見過ごしたり、無視したり、価値を貶しめてきた問題を、もう一度偏見にとらわれず見なおすことの重要性が認識されたと思う。できるならば、そのような視点に立った概論書の執筆が望まれるが、それは今後の課題であろう。

#### ラウンドテーブルセミナー「合評：宮台真司『権力の予期理論』」

コーディネーター 志田基与師（横浜国立大学）

数理社会学会には、権力現象に強い興味をもつ研究者の数が多く、これは、旧数理社会学研究会の権力研究班を受け継いだものであり、これまでにも、二回のラウンドテーブルセミナーと、『理論と方法』に権力の特集、そして数多くの自由報告を提供してきた。今回は、焦点を思いきり絞って、宮台真司氏の近著だけを材料とし、各人が感じている疑問やコメントを総ざらいすることを目指した。その意味では、きわめて特殊なテーマ設定であったが、12名の参加者により、高密度、活発な討論を展開することができ、きわめて実りが多く、時間の不足が悔やまれる。参加者は、井上寛、加田修、木村邦博、国崎敬一、佐藤嘉倫、下村圭子、富山慶典、永田えり子、西阪仰、橋爪大三郎、宮台真司の各氏（50音順）と志田であった。

はじめに、宮台氏の著書に関して、すでにならなかのコメントを公にしておられる、橋爪氏、木村氏、佐藤氏、加田氏の4人の方から、そのコメントの内容をかいつまんでご報告頂いた。

その上で、宮台氏自身のリプライを頂戴し、実質討論に入った。最も大きなテーマは、予期理論的な権力理論が、果して社会理論あるいは権力理論として説明理論でありえる

（た）か、という点であり、志田の整理で細かく言うならば；①予期の前提となる、制度や権力源泉がそれ自体権力を前提にしているのではないか、権力理論として、無限選行ないし循環理論になってしまうのではないか；②予期自体がなににたいする予期であるのかによって結果が異なるのではないか；③予期は、個人内部の出来事であるが、社会は複数の人々が互いに予期しあう事態であり、ゲームの理論との接続は不完全なのではないか；④これと関連して、独占や外部効果に類似するような様々な集合的な効果に関する目配りの必要性も指摘された。

宮台氏はいちいちの論点に誠実に対応され、いささか蹶歩気味のきらいがないではなかったが、大部分の論点に回答を頂くことができた。その結果明らかになったことを志田なりにまとめて置けば、宮台氏の意図もまた結果としても、この著書ではセルフコンテインドな予期による権力の説明理論ではないこと、むしろ宮台氏の意図するところは、権力体験の構成要件を服従者の予期に置くことによって権力現象全体を視野に収めるという記述に主眼があること、そして権力理論にとって重要なのはその「書きわけ」であること、説明のための論理構成は、予期のみを前提とすれば済むわけではなく、別種の概念を要請する必要があるかもしれないことなどである。氏の近刊予定の行為理論と併せて改めて検討するのが楽しみなどである。

最後に是非とも付け加えなくてはいけない。宮台氏の著書が（お世辞一切抜きで）これまで公刊された権力理論の中では「最長不倒距離」を達成したものであることは全員によって確認された。

ポスターセッションを終えて

木村隆之（厚生省）

先日の学会においては多数の方々より貴重なご意見をいただきありがとうございます。学会での報告の冒頭にも申しあげましたように、私のような門外漢に対してもあのような発表の機会を与えていただいたのみならず、建設的なご意見を数多くいただきましたことに大変感謝しております。

事務局よりポスターセッションを終えての感想を報告せよということですので、ごく簡単に率直な感想を述べさせていただきます。

今回の方式で良かったと思う点は、徹底的に議論ができたことです。特にその場で数式を展開して、グラフを書いて議論するというのはポスターセッションならではのもので、こうすればもっと分かりやすくなるとか、そもそもジレンマとはなんだろうという議論がなされ、私にとっても大変有意義なものでした。しかしながら、時間的制約もあり、一人の方が一つのポスターセッションにしか参加できなかったのは残念でした。聞かれる立場の方にとっては一つの話しかきけなかったわけですし、報告する立場の方にとっても限られた方の意見しか聞けなかったわけです。また、私は同時に報告された他の方のお話を聞きたいと思っておりましたが、その機会がなかった点も残念でした。

最後に、本題からははずれますが、パソコン通信を用いた情報交換について提案します。数理社会学会で独自のBBSを持つのは大変ですが、既存のパソコン通信を用いて